

## メッセージアウトライン

### ヤコブの手紙 2:19~26「信仰と行いⅡ」

[19-20]「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか」

クリスチャンは神はおひとりであるということに当然信じている。しかし、ヤコブは悪霊どももそう信じて身震いしていると言う。不信仰でにぶい人間よりも、悪霊たちの方がはるかによく神のこと、イエス・キリストのことを知っている。そして、信じ、恐れ、おののいているのである。→ルカ 8:26~35  
私は神を信じ、イエス・キリストを信じている。だから信仰があるのだと主張する人に対して、それだけなら悪霊どもと同列ですよと言うのである。ヤコブはこのような人を 20 節で「愚かな人よ」と呼び、行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんかと言ひ、クリスチャンならよく知っている旧約聖書中の人物を以下で例にあげる。

[21-24]「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。あなたの見ているとおりに、彼の信仰は彼の行いとともに行いによって全うされ、そして、『アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた』という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう」

アブラハムはイスラエル民族の祖先。創世記 15:5~6 には「…彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」とある。まだ子どももなく、人間的に見ればアブラハムの子孫が星の数ほどになるという神の約束の実現の可能性が全く見られなかったのに彼は神を信じた。そして主なる神は彼のこの信仰を義と認められた。これが信仰による義といわれるものであり、十字架につけられ、私たちの罪を贖ってくださった神の御子イエス・キリストを信じる信仰もこれと同じである。それから約 30 年後、神は彼の最愛の息子イサクを全焼のいけにえとしてささげよと言われた。全焼のいけにえとは傷のない雄牛、雄羊、雄やぎなどを殺して、その血を祭壇の回りに注ぎ、その体を祭壇の上で全部焼いて神にささげることであり、これは神への全き献身、自分自身をささげるしるしとして行われた。そして神は彼の子イサクに対してそのようにせよと言われたのである。神はこのイサクをアブラハムの正統な跡継ぎとして定められていた。→創世記 17:19 しかし、イサクが死んでしまったら、アブラハムの子孫が星の数ほどになるという神の約束は不可能になってしまう。それで、彼は神の命令を拒否したであろうか。しかし、創世記 22:10~19 を見よう。創世記 15:6 で神を信じたアブラハムの信仰は、彼の最愛の子イサクを神にささげるとい行いによってあらわされた。実際は彼がイサクに対して手を下そうとしたその時に神の呼びかけによって止められたのであったが。(参 ヘブル 11:17~19)

アブラハムの信仰はむなしいものではなく本物であった。誤解してはならないことはヤコブはアブラハムの信仰に行いを加えて初めて義と認められたと言っ

ているのではない。

人が義とされるのは、神を信じる信仰によるのであり、それが真の信仰であれば、生活の中に実践となってあらわれてくるということである。そして彼は「神の友」と呼ばれるまでになった。この名前が意味するところは、「神がしようとされることをアブラハムには隠されない」ということである。→創世記 18:17 [25-26]「同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行いによって義と認められたではありませんか。たましいを離れたからだだが、死んだものであるのと同様に、行いのない信仰は、死んでいるのです」

アブラハムはイスラエル民族の祖先となり、信仰の父、神の友と呼ばれた人物であったが、ラハブはそれとは対照的に社会の底辺の信仰とは程遠いと思われがちな遊女であった。→ヨシュア記 2 章 彼女はエリコの町を偵察に来たイスラエル人の斥候をかくまい、別の道から送り出した。それは彼女の信仰のゆえであった。このような行いによって実際に彼女の信仰が生きたものであることがわかり、それゆえ、その信仰は義と認められるに足るものだということがわかる。26 節のことばは結論である。そこではたましいとからだの関係を用いて、信仰と行いとの関係を明らかにしている。単なる口先の信仰の告白だけでは、その信仰は死んだものである。これが 2 章 14 節から続くこの段落のテーマであった。

生きた信仰は必ず良い行いという実を結ぶ。私たちもそのように生きなければならぬ。